

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主論文の要旨

論文題目 雅語「ものす(る)」の歴史的研究

氏名 余飛洋(余飞洋)

## 論文内容の要旨

本論文では雅語「ものす(る)」を対象とし、その歴史の変遷について記述した。

第一章では、雅語の認識とその形成過程を踏まえ、「ものす(る)」が近世期の国学において「雅言」として位置づけられたことを確認した。平安時代の和文物語に発した「ものす(る)」は、中古から中世にかけて、貴人の動作をぼかしていう代動詞として用いられた。その代動詞用法は本動詞用法と補助動詞用法の二種類に分けられる。

第二章では、「ものす(る)」の諸用法と史的変遷の概要を確認し、とくに本動詞用法について観察した。本動詞用法のうち、自動詞としての「ものす(る)」は、主に「移動」「存在」「その他(懐妊、結婚など)」の意味で用いられる。「移動」を表す「ものす(る)」は「達成性」「意志性」という性質を持っているといえ、その用法は近代以降にも存続する。「存在」を表す場合は、中世後期以降の用例の減少が顕著であり、近代以降には用例が見られない。他動詞としての「ものす(る)」は、中古、中世には他動性が弱い他動詞用法がほとんどである。近世に入ると、他動性が強い用例が増え、近代以降になると、ほとんどの用例が他動詞用法となる。このような変化が見出されるのは、「ものす(る)」の「達成する」「結果物がある」という歴史的に一貫した特性によるものであり、近世以降の変化はこれがさらに明確化した結果と考えられる。

第三章では、「存在」を表す「ものす(る)」が減少した原因を考察するために、中世期に同じく「存在」を表す「ものしたまふ」「おはす・おはします」「わたらせたまふ」の比較研究を行った。「ものす(る)」は「存在」を表す場合においても「結果(物)が伴う」「人間のリアルな動作を描写する」「特定の人や集合の存在を表す」などの特性に即した用法に偏るが、擬古的な物語に影響を受けた作品にはわずかながら残存する。軍記物に「ものしたまふ」が出現しない事実は、「ものす(る)」の和文散文専用という文体的な制約によるものと考えられ、「わたらせたまふ」との交替とは考えにくい。

「ものす(る)」の中世後期以降の様相としては、補助動詞用法の衰退、「ものしたまふ」敬語形の衰退が顕著である。そこで第四章では、補助動詞「ものす(る)」の衰退

過程を考察した。衰退の要因として三点が指摘できる。まず、補助動詞「-あり」の変化と衰退である。中世期には、状態・属性の持続を表す「に-て-あり」が機能語「にてあり」「である」へ、動作主の動作の持続を表す「て-あり」が機能語「てある」へ変化して、「-あり」は機能語の一部となった。これにより「ものす(る)」の代用が適わなくなつたと考える。次に、補助動詞「ものす(る)」の用例が「物語」というジャンルに偏在していた点である。中世以降、物語類は少なくなり、補助動詞「ものす(る)」は運用の環境を失つたといえる。最後の要因もこの点に関わる。補助動詞「ものす(る)」は用例のほとんどが「たまふ」「はべり」を伴う敬語形であった。「ものしたまふ」という表現も尊敬の補助動詞「たまふ」の衰弱と相まって衰退したと考える。

以上の観察を踏まえ、第五章では文体を指標に「ものす(る)」の変化を検討した。中古から中世にかけて和文物語という文体的制約が顕著であるが、動作をぼかしている代動詞としての用法は、抄物などにも見られる。中世後期には事実上「雅語」という位置づけを得たことが確認できる。近世にも一部の知識人により擬古文体で継承され、大衆文芸でも隠語として「盗む」や「横領する」などの意味で用いられる。また、咄本を中心に序文・跋文の中に「作品とする」「版木に刻む」という用法が現れ始め、定型的な運用として一般化していく。近世後期になると、国学者を中心に、平安時代の「雅の世界」に憧れ和文で文章を書こうとする活動が盛んに行われる。その活動の中で、「ものす(る)」も「雅語」の一語として認められ、衰退した補助動詞用法や「存在」を表す用法などを含め、自覚的に使用される。国学者以外の文章では、「ものす(る)」の使用がごく限定的である。それは、中古以来使用されてきた「作品とする」という他動詞用法で、近世後期でも序文・跋文の中に幅広く見られ一般化を果たしている。この用法が近代以降の知識人の文章語にも継承された。こうして「ものす(る)」は、文芸活動を中心として「詩や小説などを書く・作る」かつ「作り上げる」という成果を伴う動作を表したい時要求される文章語として定着を果たしたと考えられる。

終章では以上の考察をまとめ、課題として、同じく雅語として位置づけられた類語の事例研究などを挙げた。